

嫌われ令息

ノエル・ヴァレンタインは

一途な愛に気づかない

死に戻りの世界で運命だと言われても

登場人物紹介

ノエル・ヴァレンタイン

Ω

ヴァレンタイン伯爵家の子息。幼いころに運命の番であるレイシスと婚約するが、嫌われているようではないか？

レイシス・ブラウン

α

ブラウン侯爵家子息。冷静沈着な次期宰相でノエルの運命の番。寡黙で口下手な人物のはずが……？

イヴァン・ロードメリア

Ω

レイシスの幼馴染で、オメガの次期国王。

ウインター・ホワイト

α

ホワイト公爵家子息。ノエルと同じクラスの友人でよき理解者。

ルナ

ノエルの専属侍女で、幼いころからそばで見守ってきた。

ステラ

ノエルと一緒に生まれた妖精で、オメガ以外には見ることが出来ない。

ジルベール・フィオレ

α

ノエルの兄的存在で、王宮騎士団団長。

プロローグ

なんだか、変な香りがする。

砂糖と蜂蜜をありったけ鍋に入れて長時間煮込んだような、ただただ甘ったるいだけの匂いが鼻を通って全身に駆け巡る。甘いものは好きだけれど、この匂いには不快感を覚えた。

甘い匂いに包まれて、まるで全身を支配されたかのように、指の一本も動かせず、体が泥のように重たい。

「ああ、ノエル・ヴァレンタイン……やっとな、やっとな……」

（――誰？）

目も開けられないほどぐったりしている自分の傍から、くぐもった声が聞こえた。

肌に吸い付くような、なめらかな質感の革手袋で頬を撫でられて、思わず眉間に皺を刻む。近くにいてであろう人物が「ふっ」と小さく笑うと、空気が揺れたのが分かった。

「お前は本当に美しい。このときをどれだけ待ち望んでいたことか……お前にはきつと分らないだろうな」

（もしかして、誘拐でもされたのだろうか？）

体が思うように動かないことを考慮すると、なにかしらの魔法をかけられている可能性が高い。確か記憶では、城下町の本屋にいたはずだ。新しい本が手に入ったから、読書のお供に好きな茶葉に合うスイーツを買って帰ろうと思っていた。

（そうだ、俺は……）

そろそろ屋敷に帰ろうとしていたとき、怪しい人物が路地にいるのを見かけたのだ。

黒いローブに、金色の刺繍ししゅうが施された仮面をつけたその人物と目が合った、あの瞬間からの記憶が消失している。

「ノエルと番を解消しろ。応じないのであればノエルは殺す。お前の番の命は俺が握っているから、いつでも殺せるぞ」

（——なに、まって、なんの話？）

自分が今どこにいるのか、誰になにをされているのか。それが分からない状況の中、重い瞼を微かに開いた。ぼんやりとした視界の中に映ったのは黒いローブの人物。

ローブと同じ黒色の革手袋をしているその人物がパチンツと指を鳴らした途端とたん、光る鳥が現れた。羽も尾も長い幻想的な光る鳥は、手紙をくちばしに咥え、飛び立つように消えていった。

それは、自分の魔力を動物などの形に変えて相手に届ける「伝言魔法」だった。だから、その人物が先ほどの言葉を誰かに届けようとしているのだと理解するのに時間はかからなかった。鳥が消えた薄暗い部屋の天井を眺めていると、ローブの人物がこちらを振り向いた。

「ちょうど良いときに目が覚めたな」

「ここ……どこ……？」

「分からずとも良い」

まだノエルの視界はぼやけていて、ローブの人物が誰なのかははっきりと見えないけれど、声かまして男だということが分かった。

それからすぐ、今度は光る狼が手紙を咥えてローブの男の元へ現れた。

男が狼に手をかざすと、咥えていた手紙の封が切られて宙に便箋びんせんが飛び出した。

「——煮るなり焼くなり殺すなり、好きにしろ」

薄暗い小さな部屋の中、不気味な男と一緒にいる自分の耳に届いたのは、冷たい夫の声だった。

伝言魔法というのは厄介だ。

手紙を送った相手の声がそのまま聞こえるのだから、芳しくない返事だと尚さら胸を抉えぐられる結果になる。

「ふはははっ！ 番の解消より、番の死を選んだようだぞ、お前の『運命の番』は！ ……でもそうか、あいつはそれを選んだのか」

死んでもいいと思われたのは、ショックだった。

ローブの男の目的はさっぱり分からないが、脅迫状への返事をレイシスは自らの意思で選んだのだ。

「……恨むなら、レイシス・ブラウンを恨むんだな」

まだ幼い頃に「運命の番」だと発覚して婚約した、一歳年下の夫、レイシス。

彼にとってこの結婚は人生最大の汚点であり、望んだものではなかった。

本当は好きな人がいたのに「運命」というものに邪魔されて、この人生を歩むしかなかったのだ。
（……ああ。分かつてはいたけれど、俺ってなんの価値もないオメガだったんだ）

死んだほうがいいと思われているなんて、驚くほど惨めな人生だ。

運命の番だからとはいえ、結婚してくれたレイシスには感謝しているし、屋敷に置いてくれたこともありがたい気持ちでいっぱいだった。

決して、レイシスのことを嫌いだったわけではない。

本人にも周りにも話したことはないけれど、この国の誰よりも、レイシスには幸せになってほしいと願っていた。

運命の番なんて無視して、彼自身が心から結ばれたいと願う人と一緒になつてほしかったのだ。そうすれば、成長するにつれて見られなくなった笑顔も、優しい声色や明るさも健在だったかもしれないのに。

（あの人が笑った顔を最後に見たのはいつだったのか、もう思い出せもしない）

「ごめんなさい、レイシス……。もういなくなるから、これからはどうか幸せに生きて……」

運命に縛られず、自由に生きてほしい。

自分のいいと思つた道にただ進み、好きだと思う人と触れ合い、一度しかない人生が終わりを告げるときに、後悔がないように生きてほしいと願っている。

本来ならば自分がその役目を担いたかったけれど、彼と歩む道が分かれていたのだからどうしよ

うもない。いつかまた、その道が変わるときが来るかもしれないと、お互いに愛し合える存在になれるのかもしれないと、甘い未来を想像したこともあった。

「……早く殺して……早くあの人を、自由に……」

精一杯振り絞つた弱々しい声にローブの男は小さく笑い、まだ思うように動けずにいるノエルの体をぐるりと反転させた。

うつ伏せにされたかと思えば、うなじに触れられて、ビクツと体が震える。

男が触れている場所にはうつすらと噛み跡が残っていて、それだけが唯一レイシスと繋がっている証だった。男の手が離れたと思つたのも束の間、次の瞬間、鋭い痛みがそこを襲う。

「っあ、あああ……ッ」

（——痛い、気持ち悪い、吐きそう）

番——レイシス以外に触れられないという、オメガとしての防衛本能が働いた。番の契約の跡があるこの体は本能でレイシスを自分のアルファだと認識している。

だからなのか、ローブの男が上書きしようとうなじを噛んでくると、言いようのない嫌悪感に襲われた。そして、男がノエルの耳元に唇を近づけてもごもごと「なにか」を囁く。その瞬間、ノエルの心臓に握りつぶされるような痛みが走った。頭の中はモヤがかかったようで、男の囁き声だけがこだました。

人間、死ぬ間際になると走馬灯を見るのだと聞いたことがある。自分がそういう状況になつてもなにも思い出しはしないと思つていたのに、ノエルの頭の中に浮かぶのはレイシスのことばかり

だった。

（本当は、レイシスに愛されたかった——）

ずっと口にできなかったノエルの本心。レイシスには他に好きな人がいると分かっていたので、ノエルが愛されることはないのだと諦めていた。

レイシスのことを嫌いだと思ったことはないし、できることなら二人で一緒に幸せになりたかった。

——死ぬ間際にこんな願望を抱いたって、もう無意味なのだけれど。

「れ、しす……っ」

他の男にうなじを噛まれて跡を上書きされ、凍えるような寒さを感じるとともに呼吸が浅くなっていく。一度大きく心臓を突き抜けるような鋭い痛みを感じたあとにぷつりとなにかが切れた。レイシスとの繋がりが切れたのだろうか。視界はじわりと涙でぼやけ、冷たい寝台の上でされるがままになっているノエルの頭の中にはレイシスの顔が浮かんた。

（俺は、あなたを愛していた、のに——）

「ノエル・ヴァレンタイン。お前の“運命”は他にある」

その言葉とともに、視界は暗闇に包まれた。

第一章

酔いそうなほど甘く、重厚なムスクの香り。

その中にピオニーやゼラニウム、ラベンダーのフレッシュな匂いがする。あまり女性的な香りは好んでつけないけれど、似合うからと侍女がいつも特別に調合してくれるこの香りを、ノエルも気に入っていた。

（この匂いは、あまりにも懐かしい）

学生時代に戻るような、懐かしい香りにノエルはハッと目が覚めた。

「——おはようございます、ノエル様。今日はいつもより遅いお目覚めでしたね」

心地よく耳に響くソプラノの声。綺麗にまとめられた淡いベージュの髪に、ライトブラウンのくりくりとした瞳の女性がノエルの顔を覗き込んでいる。そんな彼女の姿に驚いて飛び起きると、彼女もまた大きな目をさらに見開いた。

「どうなさいました？ すごい寝汗が……夢見が悪かったのですか？」

「ル、ルナ……」

「はい、ルナでございます。そのままでは気持ち悪いでしょうから、ご入浴の準備をいたしますね」

目覚めたノエルにルナは柔らかな笑みを向け、他の侍女に入浴の準備を指示している。ノエルは信じられないという表情を浮かべながら、朝の支度を進めるルナを見つめた。

「い、いつこの屋敷に？ 宰相様さいしやうが許してくださったの？」

「宰相様というと、アルバート・ブラウン様ですか？」

「え？ いや、え……？ お義父様ではなくて、レイシス・ブラウン……」

ノエルはなぜこの場にルナがいるのか理解できなかったが、さらに彼女の口から「アルバート」の名前が出てきたことにも驚いた。アルバート・ブラウンといえば確かに、この国、ロードメリアの宰相なのは間違いない。だが、それは三年前までの話であるからだ。

でも彼女はきよとした顔をノエルに向け、困ったような笑みをこぼした。

「確かにレイシス様が宰相になられるのは決まっておりますが、まだ十六歳ですよ。宰相の仕事に就くのはまだまだ先の話かと」

「じゅ、十六歳？」

「ええ。今年が十七歳の年になりますね。なんせノエル様がもう十八歳になれますから」

「……は？」

さらに理解できないことを言われ、ノエルの頭の中はぐちゃぐちゃに掻き乱みだされた。今のノエルは三十歳で、結婚して十年は経ったはずだ。

夫のレイシスが宰相の職に就いたのは三年前。彼の父であるアルバートが病気で亡くなり、レイシスが正式な宰相として就任した。

でも、ルナの話では違うらしい。

ノエルが知っている全ての情報と食い違っている。いや、食い違っているというよりは、まるで過去かこに戻っているようだった。

「よほど悪い夢を見たのですね。ヴィオクイーン学園に行く前にゆっくお風呂に浸かりましょう。クマ取りをして、その青ざめた顔もなんとかしないといけませんわ。学園ではレイシス様とお顔を合わせることもあるでしょうから」

「学園、って？」

「本当にどうなさったんです？ さては昨晚も、夜更かしされましたね？」

「そういうわけじゃ……！」

「鏡を見てみてくださいませ。こんなに濃いクマを作って、ルナの目は誤魔化ごまかせませんよ」ルナが指差した大きな鏡に映る自分の姿を見て、ノエルは思わず、その縁を掴んだ。

「ど、ど、どうということ!？」

ノエルは驚愕きやうがくした。顔や肌、髪の毛の長さなど、三十歳の自分のものではなかったのだ。

この容姿はまるで――

「なん、な、なんで!? 俺、死んだのに! どうして学生時代に戻ってるの!？」

「はい!? 死んだとはどういうことでございますか、ノエル様!」

取り乱すノエルの横で、ルナも困惑していた。だが、彼女に事情を説明している余裕もない。ぐしゃぐしゃと頭を掻き回し、ノエルはぎゅっと目を瞑つぶった。

「ちがう、これはきつと天国だ、天国なんだ……！俺みたいな人間でも、神様が気の毒だからって天国に送ってくれたに違いない……！」

「なにを……そんな縁起でもないことをおっしゃらないでください！」

これはきつと、都合のいい夢だ。死んだなんて思いたくない自分が見ている都合のいい夢なのだと、ノエルは混乱する頭で考えた。

なんせ、死んだら学生時代に戻っていたなんて非現実的な話があるわけない。

混乱のあまり頭痛がして、顔を歪めた。額に手をやると、薄暗い部屋で聞いたくぐもった声が頭の中に一瞬流れ、どくどくと心臓が脈打ち背筋が凍る。

「……今日、学園には行かないことにする」

「ノエル様……？」

「入浴の準備をしてくれる？ やっぱりどこか変みたい」

「お医者様をお呼びしましょうか？ もしかしたらヒートの前兆かもしれません」

「そこまではしないでいいよ！ とりあえず今日は放っておいて、ごめん」

一度、頭の中を整理しなかった。無理やりルナを追い出し、ドアに背を預けたノエルはそのままズルズルと床に座り込んだ。

記憶が蘇ってきたノエルは心臓が痛むような気がして、自然と息が止まる。

もしかするとこれも一種のヒートの兆候かと思ったが、体に熱っぽさは感じない。オメガ特有のヒートというものは数ヶ月に一度やってきて、アルファを強く惹きつけるフェロモンを発し、期間

中は発情して繁殖以外のことは考えられなくなる厄介なものだ。

ただ、ノエルが感じている頭痛や気持ち悪さはヒートによるものではないと、ノエル自身が分かっていた。

「いったいどういうことなの!? なにが現実でなにが夢……？」

確か、薄暗い地下室のような場所で動けなくなっていた。黒いローブに身を包んだ仮面の男に拘束され、視界が真っ暗になったことを思い出す。

（俺はあのときに、死んでしまった……んだよね？）

「それなのにどうして、学生時代に……」

なにがどうなっているのか全くとっていいほど分からないが、この心臓の鼓動は本物だと思った。それにローブの男にうなじを噛まれた苦しさ、最期に聞いた「あの人の冷たい声を覚えている」。

『――煮るなり焼くなり殺すなり、好きにしろ』

薄暗い部屋の中、ローブの男の傍で聞いた冷たい言葉を思い出してぶるりと体が震える。

自分を拘束した人物の見当はつかないが、その男の脅迫に返事をしたノエルの夫、レイシスの声を思い出すと再びズキンッと頭に痛みが走った。

「……本当に、なにがどうなってるの？」

部屋はノエルの実家であるヴァレンタイン伯爵家の自室で間違いない。用意された綺麗な制服もノエルがかつて通っていた学園のもので、机には鞆と教科書が置かれている。

ルナが淹れてくれたのであろう紅茶の匂いと、彼女が調合してくれたノエル専用のアロマが混ざった匂いがとても懐かしくて思わず涙が滲んだ。

「神様が助けてくれたのかな……」

悲惨な最期を遂げたはずの自分が、神様の力によって生き返ったのかもしれない。

「オメガは神の使い」

そんな古臭い言い伝えをノエルは信じていなかったけれど、今だけは神の存在も信じられる気がした。

ノエルたちが生まれたこのロードメリアという国では、オメガは「神の使い」と崇められている。オメガはあまり生まれないため、希少価値が高いのだ。

ロードメリアの国宝である紫色の宝石「ヴィオクイーン」は神に捧げる宝石と言われている。オメガは皆、ヴィオクイーン色の瞳を持つことから同じように崇拜されている。

その中でも王家に生まれたオメガは特別で、次代の王になることが法律で定められている。初代オメガの王が誕生したときに国が急速な発展を遂げたことから、オメガは国の繁栄の象徴としても大事にされていて、そんな法律ができた。そういう背景もありオメガは「神の使い」と言われている。

「そもそも、神の使いなら殺さないでよ……」

記憶がそこで途切れていることを考えると、殺されたのだろう。ただ、その理由に心当たりがないのだ。

（——いや、ひとつだけ心当たりがあるといえば、ある）

「レイシス・ブラウン……」

その心当たりというのは、夫であるレイシスだ。ノエルはもしかしたら彼があ的事件を仕組んだのかもしれない、と疑っている。もし彼が仕組んだことだったなら、あの伝言魔法で聞いたレイシスの冷たい声も納得できる。

レイシスがノエルに対して恨みを持っていることは、昔から分かっていた。

ノエルが十二歳のとき、ブラウン侯爵家の長男で、アルファのレイシスと「運命の番」だと分かり、婚約をした。そして、ノエルが二十歳、彼が十九歳の年に結婚をしたのだ。

ノエルとの婚約や結婚は、レイシスにとって自分の意思ではなかった。運命の番だと分かってしまったから、両家に無理やり婚約を結ばされたといっても過言ではない。

彼は元々、オメガの王子で幼馴染のイヴァン・ロードメリアに恋をしていたのだから。

あのとき、ノエルと出会わなければ、二人は結婚していたのだろう。しかし、その未来は絶たれた。それだけではなく、イヴァンが若くして亡くなったことも、ノエルがレイシスから恨まれている原因のひとつだろう。

「でも、あれは……」

イヴァンは百年ぶりに王家に誕生した、待望のオメガだった。

そしてその一年前、ヴァレンタイン伯爵家に生まれたノエルもまた、国から期待されるオメガの一人だ。希少なオメガが王家と貴族に一年違いで二人も生まれ、この国の繁栄は間違いなく国民

からも期待されたものだ。

ただ、それはイヴァンが生きていた二十五年間の話だった。

イヴァンは学園を卒業後、公爵家の男性と結婚した。

順風満帆な人生を歩んでいる最中、二十五歳のときに毒を盛られその生涯に幕を閉じた。

毒はイヴァンの紅茶に混入していたことから、側近だったノエルは責任を問われることになった。仕える主人もいなくなり、周りから白い目で見られながらノエルは仕事を辞め、ブラウン家に引きこもるしかできなかったのだ。

レイシスがノエルをブラウン家から追い出さず、屋敷に置いてくれたことは感謝している。

元々破綻していた結婚生活だったが、レイシスの想い人であるイヴァンが亡くなったことは二人の溝をさらに深めるきっかけになった。

「もしかしたらレイシス様は、俺が犯人だと思っていたのかも……」

当時、ノエルは犯人ではないかと疑われたが、証拠が見つからず釈放されたのだ。その後、結局イヴァンを殺した犯人は見つからなかった。レイシスがノエルのことをずっと疑っていたのは知っていた。復讐の機会を窺っていたのかもしれない。

「だとしたら、ものすごく嫌われていたんだな、俺は……」

レイシスの冷たい視線や態度には慣れていると思っていたが、殺害を計画されているとは想像していなかった。しかも、あんなに手の込んだ芝居をして、わざわざ最後の言葉を聞かせてくるくらいだ。かなり恨まれていたと言っても過言ではないだろう。

「ノエル様、入浴の準備が整いました。こちらへどうぞ」

「ありがとう、ルナ」

ルナに促されて入浴すると、冷え切っていた体に温かいお湯が沁み渡る。

湯船に浸かりながら何度考えても、自分が死んだことは夢ではなく現実だった。だが、突然訪れた安寧に今の自分は生きているとノエルは思えた。

「毎日お姿を拝見していますが、やはりノエル様のお髪は素敵ですね」

「え？ 髪？ ……イヴァン殿下のほうが綺麗だと思うよ」

「ふふ。ヴァレンタイン家侍女の欲目というものです」

アルファやベータなどの第二次性は、大体が十三歳以降にしか確定しないとされているが、オメガだけは生まれた瞬間に分かる。

オメガの性を持つ者は色素の薄い金色か銀色の美しい髪で、瞳はヴィオクイーンのような透明感のある紫色だと決まっている。

ノエルは月の光のように透き通った銀髪に紫色の瞳、イヴァンは太陽のように柔らかに輝く金髪に紫色の瞳の持ち主だ。

貴族であれば、オメガは生まれた瞬間から手厚く保護され、丁重に扱われる。

ただ、それ以外のオメガは違う。大体は教会に保護されて聖職者になるが、変な集団に攫われて他国に売られるという不穏な噂も耳にする。イヴァンはその状況を変えようとしていたが、成し遂げる前にこの世を去ってしまった。

「いつかレイシス様とご結婚するときは、私もノエル様のご準備させていただきたいです」

「……まだ、いつになるかも分からないのに」

「それでも、きつとあと数年です。そう思うと感慨深いですね」

巻き戻ってきたことが夢じゃないのであれば、二年後にレイシスと結婚する未来を変えたい。

（俺が今後、死なないためにはどうしたらいい？）

「入浴後は温かいハーブティーを淹れますね。学園にもノエル様がお休みすることは伝達済みです
ので、今日はゆっくりなさってください」

「うん、ありがとう」

ルナの計らいもあり、今日はゆっくり過ごせそうだった。入浴し、温かいハーブティーを飲んで
一息ついたノエルは、ベッドサイドのテーブルに置いてあったノートを手繰り寄せ、ペンを走ら
せた。

「まず、イヴァン殿下の婚約が決まるのは卒業間際で、卒業後すぐに結婚。俺とレイシス、いやレ
イシス様はその卒業から一年後に結婚……そう考えるとあんまり時間がない」

実は、イヴァンから彼の秘密を聞いたことがあった。彼には結婚した相手とは違う、好きな人が
いたのだという。だから、ずっと婚約者は作らずにいたが、痺れを切らした国王が縁談をまとめて
しまったのだとノエルに話してくれた。

その話を聞いたとき、ノエルの頭に真つ先に浮かんだのは言わずもがなレイシスだった。イヴァ
ンとレイシスはきつとお互いに同じ気持ちを抱いていたのではないか。それなのに、レイシスの運

命の番であるノエルの登場によって人生が狂ってしまったのではないのか。

「なんとか二人を婚約させないと……もうあんなことになるのは嫌だ……」

イヴァンはロードメリアに必要な存在であるし、レイシスに嫌われながら生きていくのも
真つ平御免だ。ノエルが二人の邪魔をしなれば、レイシスもあれほど冷酷になることはなかった
のだろう。

——過去に戻ったのにはなにかしら理由があるはず。

それはきつとレイシスとイヴァンを結婚させ、ロードメリアの繁栄のために未来を変えろという、
神様からの啓示なのだろうとノエルは考えた。

とりあえず、この一年の間に婚約を解消しないと話にならない。できることならレイシスのほう
から婚約を解消してもらったほうが彼の経歴に傷がつかないだろう。

「どうやって婚約を解消してもらったらいいのかな……」

絶対に幸せになれる未来があるのに、レイシスはなぜ婚約破棄に踏み出せないのだろうか。

評判に傷をつけたくないから？ 世論の評価や期待に縛られているから？

もしかすると、ノエルとの婚約を解消することで、なにか不利益があったりするのだろうか——
レイシスはイヴァンの毒殺疑惑のときでさえ、ノエルとの縁を切らなかつた男だ。彼が縁を切れ
なかつた理由として考えられることとしたら——

「……運命の番つてことがネックなんだろうなあ」

ノエルが十二歳のとき、王宮主催のお茶会に参加したことが全ての始まりだった。このお茶会は

実はノエルとイヴァンのために開かれたもので、二人の婚約者候補を探す催しだったのだ。

しかし、そこで思わぬ事件が起きる。

ノエルとレイシスは目が合った瞬間、お互いを番だと認識してしまったのだ。このお茶会に参加した貴族の子供は早期検査をしてアルファだろうと診断された人たちばかりで、レイシスもその一人だった。その後、ブラウン家からノエルに婚約を申し込んだのだ。

「いつそのこと、子供の頃まで時間を巻き戻してくれたらよかったのに……そしたらお茶会には参加しなかったし、レイシス様と出会わないように徹底的に避けたんだけど」

運命の番と出会うのは、オメガが生まれる確率よりも低いと言われている。この国にオメガが二人も生まれたことは奇跡に近い。だから将来、宰相になるレイシスとイヴァンの側近になるノエルが運命の番であることは、奇跡に近く、世間からの期待も大きかった。

「世間からのイメージをどうにか変えられたら、レイシス様も心変わりするかも……?」

運命の番は普通の番より相性が良く、幸せになると言われている。ただノエルたちは幸せな結婚ではなかったので、所詮言い伝えでしかない。

自分が愛する人と結ばれたほうが幸せになれるはず。レイシスにとって、その相手はイヴァンなのだろう。

そんなことを考えながらうんうん唸っていると、ノエルの部屋の前を通りかかった侍女たちの声が聞こえてきた。

「ねえ、新しく出た『エーデ』読んだ?」

「読んだ読んだ! 今回もかなり気合が入った作画とストーリーだったわねえ!」

「オメガのエルとアルファのシス、運命の番の話ってやっぱりロマンチックでいいわあ……」

「うちのノエル様とレイシス様も、あの本みたいに甘美な恋愛をなさるのかしら」

「きつとそうよ! だってお二人は運命の番だもの!」

（『エーデ』? 俺は読んだことないけど、そういえば前に流行ってた気がする……）

彼女たちが話している運命の番を題材にした小説や絵本は王道のラブストーリーとして、定着している。昔から、運命の番をテーマにした、たくさん物語が出回っているからか、運命の番に誰もが憧れ、ロマンチックなものだと思っているのだ。

「もし俺がオメガの王子と幼馴染のアルファのロマンズ小説を書いたら、みんなイヴァン殿下とレイシス様の恋を後押ししてくれるのかな……」

ノエルは自分で言っただけ、ハッとした。

あまりにも無謀かもしれないけれど、手っ取り早く世論を動かすには一番いい方法かもしれない。……もしかして、俺って天才かな?」

実はノエルには、ある秘密があった。

今まで誰にも言っただけで、重大な秘密だ。

「どうして今まで忘れてたんだろう! 俺の“萌え”を!」

ノエルは興奮気味に、自室の本棚の前に立った。一番下の段、しかもさらにその下の板を外して出てきた紙の束や古びたノートに安心してホッと息を吐く。

「俺の大事な宝物……！」

ぶるぶると震える手でその紙の束を取り出した。ノエルは部屋の鍵がしっかり閉まっているのを確認して、その紙の束をベッドに広げた。

「俺が昔からコツコツ書いてきた、レイシス様とイヴァン殿下の妄想小説……っ！」

ノエルの秘密というのは、趣味でイヴァンと自分の婚約者であるレイシスを題材にした妄想小説を書いていたことだ。

昔からレイシスの運命の相手は自分ではなくイヴァンだと思ってきたせいなのか、妄想上でもいいから、いつしか二人のことを幸せにしてあげたいと思うようになっていた。だからイヴァンから「実は好きな人がいた」と聞いたときはひどく申し訳ない気持ちになったし、切なかったものだ。

「……これは神様からのチャンス。だから、俺は自由にやらせてもらおう！」

巷で話題の『エーデ』がどんなものか読んで、流行り風に自分が書き溜めていた「レイシス×イヴァン」の妄想小説を修正してみようとノエルは画策することにした。

小説が多くの人に読まれたら『運命の番つて素敵！』という意見から、『運命の番じゃなくても、お二人は運命だわ！ 結婚しろ！』と、変わる者もいるはずだ。そうすればすんなり、レイシスとの婚約はなくなるに違いない。

ノエルはドアにぴったり耳をつけ、部屋の外に誰もいないことを確認するとパチンツと指を鳴らす。するとノエルの目の前に、小さな光がパツと宿った。

「どうしたの、ノエル？ って、あら？ 今日は学園に行っていないの？」

ノエルの前に現れたのは、手のひらに乗るくらいの小さくて美しい妖精だった。ロードメリア王国には妖精が住んでいる。多くの妖精は花と一緒に生まれ、花の蜜を主食に生きている。実に可愛らしい存在だ。

ただ、ノエルの目の前に現れたのはノエルの運命共同体ともいえる特別な妖精。オメガは魔法を使うことができないが、なぜか妖精を見る力があり、オメガが生まれると同時に寄り添うように妖精も生まれてくる。そんな妖精たちは自分の相棒ともいえるオメガの「幸せ」が主食であり、オメガの命が尽きるときはその妖精も眠りにつくと言われている。

「呼び出してごめん、ステラ。今日はちょっと調子が悪くて休んだんだ……それで、どうしてもお願いしたいことがあって」

「私に？ お願したいことってなあに？」

ノエルとともに生まれた妖精、ステラはノエルと同じ銀色の長い髪にキラキラと透き通った羽根を持っている。髪に紫色の花を挿した彼女は、ノエルの前で首を捻^{ひね}っていた。

「ジュリアとハンナの部屋から『エーデ』っていう本を持ってきてほしいんだけど」

「本？ いいわよ、少し待っててね」

ステラがくるりんっと一回転するとノエルの前から消え、ぱちつと瞬きをする間に本を抱えて戻ってきた。

「これかしら？ とりあえず一巻だけね」

「ありがとう。やっぱりステラは頼りになるよ」

「うふふ、そうでしょう。なんせノエルの妖精だもの」

彼女はノエルの肩にちょこんと腰掛ける。受け取った本は普通の文庫本より少し薄めで、背表紙にはしっかり『エーデ』と書かれていた。そしてページをめくってすぐ、ノエルはバンツと音を立てて本を閉じた。

「きゃっ！ どうしたの？ なんにも見えなかったわ！」

「こここれスタラが見ちゃいけないものだよ!!」

「え？ どうして？」

そこにはなんと、一ページ目から男と男が睦み合っている濃厚なラブシーンが描かれていたのだ。勢いよく閉じた本をまた覗いてみるが、それは見間違いではなかった。

「な、な、なんて破廉恥な……っ！」

裸の男同士が睦み合っている挿絵にノエルは口から心臓が飛び出そうになった。しかし、次第に落ち着きを取り戻すと少しだけ興味があつたこともあり、ドキドキしながらその先のページをめくってみることにした。もちろんスタラに過激なシーンを見せないように。

物語はあるオメガとアルファが幼少期に出会い、運命の番だと分かるシーンからスタートしていた。

「まるでノエルとレイみたいね」

「……そう？」

横目でスタラをチラッと見ながら、ノエルはページをめくる。

「そうでしょう。二人だって幼い頃に出会って、運命の番だって分かったわ」

「それはそうだけど……偶然じゃない？」

運命の番のラブストーリーなんてそこら辺に山ほど転がっている。でもスタラの言うように、この話はノエルとレイシスの出会いによく似ていると感じた。

ただ、二人の関係と違うのは、お互いを激しく求め合ったり、まだ婚約中なのに肌を合わせたりなんてしたことはないということ。

王族や貴族にとつて、婚約中の性交渉は御法度だ。特にオメガは神の使いとされているので結婚するまでは純潔を守らなければならない。もし婚前交渉をしたのが公になれば出家しなくてはいけないし、誰かと番になることも許されない。〃神様〃のために、教会でその一生を捧げることになるらしい。

「それにしたって、さすがにこれは……俺とレイシス様は一切こんなことしてないし、モデルではないと思うけどね」

「そうかしら？ でも主人公のオメガは銀髪にヴィオクイーン色の瞳よ」

「たとえ俺がモデルじゃなくても、オメガは金髪か銀髪しかないんだから……」

「まあ、そうね。ノエルとレイはこんなに情熱的な恋人同士じゃないもの」

「……だね」

オメガのエルとアルファのシス、二人の恋物語は一卷から胸焼けしそうなほど甘く、激しくお互いを求め合うもので、ノエルとレイシスとは真逆だった。

「こんな話を読んだら、そりゃあみんな運命の番に憧れるし、いい家族になるんだろうなって思うよね」

「ねえノエル、あなたどうしちゃったの？」

「え？」

「なんだかいつものノエルと違う気がするわ。私の気のせい？」

妖精は色んなことを助けてくれる存在だが、ステラは特に頭がいいし勘も鋭い。ただ、ノエルが一度死んで戻ってきたという話はできなかった。もう二度とステラのことを悲しませたくないし、ノエルが死んだと知れば彼女は傷つくだろう。そしてなによりも、ノエルがレイシスとの婚約を白紙に戻そうとしていると知られたら終わりだ。

なんせステラは、ノエルとレイシスが結婚をして幸せな^{ふうふ}夫婦になってほしいと願っているからだ。でも、巻き戻る前のステラは、ノエルの「幸せ」を十分に得られなかった。

そしてノエルの命が尽きるあの出来事の数日前、ステラは輝きを失い、眠りにつくように命の灯火を消したのだ。彼女はノエルが息絶えることを察していたのだろうか。

だから、ノエルはステラと長生きするためにも、レイシスとの婚約を破棄して、決して同じ道を歩むわけにはいかないのだ。

「ステラの気のせいだよ。ちよつと調子が悪いだけだから」

「それならいいけれど……」

「急にね、ロマンス小説が書きたくなくて。ステラにも手伝ってもらいたいんだ」

「ノエルが小説を？」

「うん。実は前からの夢で……たくさんの人に読んでほしいから、ステラに魅了魔法をかけてほしいんだよね」

趣味としてレイシスとイヴァンの妄想小説を書いてきたノエルだが、誰かに読ませたことはない。世論を動かそうと画策しても、まるつきり素人の小説がすぐに売れるわけないし、多くの人に読まれるのは難しいことだ。そのため、原稿を書き上げたらステラに魅了魔法をかけてもらい、色んな人が手に取るような細工をしないといけない。

ノエルが信賴している人——たとえばルナなどに魔法をかけてもらうことも可能だが、人間が扱う魔法より妖精の魔法のほうが強力だし効き目が段違いだ。

「ノエルの夢ならお手伝いするしかないわね」

「ありがとう。あと、みんながどんなことに興味があるのか侍女たちの噂話とかで情報収集してもらってもいい？」

「任せて！」

そう言って、ステラは勢いよく飛び出した。

それから数分後、ルナが部屋を訪ねてきた。

「ノエル様、失礼します。レイシス様がいらっしゃっていますが……お通してもよろしいでしょうか？」

「……は!?」

ルナの話聞いてノエルはぎょつとした。

(レイシス様がうちを訪ねてきた!?)

彼がヴァレンタイン家を訪れたのは片手で足りるほどの回数で、滅多に訪ねてくることなんてなかったのだ。しかも、過去に同じような出来事はなかった。変わったことといえば……

「俺が学園を休んだから……?」

どういった用件かルナに尋ねると「ノエル様が学園をお休みされたので、よく効く薬草をお持ちくださったようです」と言う。彼はわざわざ昼の休憩時間を使ってここまで足を運んだらしい。

「ええ……誰にも会いたくないって言ってくれる?」

「それが、旦那様にノエル様のことをお伝えしたあとでしたので、旦那様がすでにお通ししております……直接お顔を見てご挨拶したいと言われまして……」

ノエルは顔を青くした。持っていた本を慌ててベッドの下に投げ入れ、あたかも体調が悪いのかのように装って、ベッドに潜り込んだ。

それと同時に、コツ、と靴音を響かせて部屋に入ってきたのは、端正な顔立ちの青年だった。

「体調はいかがですか」

「レ、レイシス様……」

吸い込まれそうなほど深い漆黒の髪の毛に、ノエルの髪色と同じ銀色の瞳。一目見るだけで誰もがアルファだと分かるようなオーラを放っていた。

そんなオーラが、ノエルは昔から怖かった。レイシスの内側に入るのを禁じられているような、拒絶にも似た雰囲気^{まじ}を纏っているからだ。今もそのオーラは健在で、ノエルの頭の中には「煮るなり焼くなり殺すなり、好きにしろ」というレイシスの冷たい声が蘇ってきて、心臓が早鐘を打つ。

「大丈夫ですか?」

「ひ……っ」

レイシスはベッドに横になっていて、髪を掻き分けてそつと額に手を触れる。そんな彼の行動に驚いて、ノエルの体はびくつと大きく跳ねた。

「……熱はないようですね」

「は、はい……」

——もしかすると、レイシスが自分を殺した首謀者かもしれない。

そんなレイシスと部屋の中に二人きりで、ノエルはかなり緊張していた。その上、こんなに早くレイシスと顔を合わせることは想定外で、どんな顔をすればいいかわからなかった。

「ヒートの時期ではないので、やはりただの風邪でしょうね」

「……えっ?」

「はい?」

「いや、えっと……俺のヒートの周期をご存じなんだと思って」

ヒートというのは、定期的にやってくる。

普段はオメガがフェロモンを出すことはなく、アルファもオメガも同じ学園にも通えている。念

のため、抑制剤を飲むこともあるが、フェロモンが出ていなければお互いに影響はない。しかし、ヒートだけではどうにもならない。ヒート中はフェロモンが溢れアルファに影響が出てしまうため、一週間程度は部屋に引きこもっていないといけないのだ。

そのため、ノエルの侍女や侍従はフェロモンがほとんど効かないベータの者しかない。万が一、ヒート中のオメガのフェロモンに当てられて婚前交渉をしたり、うなじを噛んで番の契約をさせられたりしないためだ。

ノエルがイヴァンの側近になることが決定しているのは、オメガ同士だからである。彼にも今はベータの侍従がついているが、ベータの中にもオメガのフェロモンが分かる者がいる。オメガ同士なら確実に“間違い”がない。だから、ノエルの将来はイヴァンが生まれたときに決まっていた。ヒート中にアルファと性交渉をすると熱が落ち着くと言われているが、婚前交渉は厳禁なのでその期間中にレイシスと会ったことはない。

だから、彼がノエルのヒート周期を知っているのは意外だった。

「婚約者のヒート周期くらい把握しています。ヴァレンタイン家の者からいつも報告をもらっていますからね」

「そ、そうだったんですか……興味のないことをいつも報せてしまってますみません」

「興味がなかどうかは僕が判断することですから。一応婚約者ですので、そういうことの把握も必要かと」

「なるほど……」

(……“一応”婚約者、か)

その程度の思いしかない婚約者のヒート周期を把握しているとは律儀なものだなとノエルは苦笑した。

「葉草は侍女に渡したので、煎じて飲んでください。風邪なら早く治さないと、勉学に遅れが出ますから」

「はい、すみません……」

レイシスの小言に、ノエルは俯うつむいて小さくため息をついた。先ほど目が覚めたばかりだからか、レイシスの冷たい言葉を聞くと、頭が痛くなる。

「僕に謝られても。体調管理くらいご自身でしっかりなさってください、ノエル」

「今度からは気をつけます……明日からはまた学園に行きますので」

「そうしてください。では、僕はこれで……つと」

(レイシス様が訪ねてくるなんて、明日は雪でも降りそう……)

そう思っていた罰が下ったのか、帰ろうとした彼がなにかに躓つまづいてそれを拾い上げた。レイシスが手に持っている本を見て、ノエルは顔からスーッと血の気が引いた。

『エーデ』……これ、最近流行っている絵本ですね。あなたが買ったんですか？」

「いや、えっと、俺のものではなくて借り物なんですけど……」

「借り物？ こんな破廉恥な本を借りたんですか？」

レイシスは本を持ったまま、信じられないというように目を丸くした。彼の性格上、こんなに破

廉恥な本をノエルが持っているのと知れば、ノエルの父であるヴァインセントに告げ口をするかもしれない。そうなつては面倒なことになるので、ノエルは急いで弁解した。

「な、中身がどんなものか知らずに借りてしまったので！ 全部は読んでいません……って、レイシス様はこの本がどんな内容なのか知っているんですか？」

この本は表紙だけでは中身がどんなものかは分からない。それなのに、レイシスはなぜ「破廉恥な本」だと断定したのかノエルは不思議に思った。

「風の噂で聞いただけです。あなたにはまだ早いかと」

「いや、いやいやいや！ 俺が早いならレイシス様はもっと早いですよ！」

ノエルが慌ててそう言うと、レイシスにギロリと睨まれる。まずいと思ったときにはもう遅く、彼の眉間に深く皺が刻まれた。

「確かに僕はあなたより年下ですけど、もうすぐ成人です。こんな絵本の一つや二つ、見たってなんとも思いません」

「そ、そういう問題ではないんですけど……！ レイシス様にそんな絵本を読ませたってアルバート様に知られたら俺が怒られてしまいます！」

「そんなことであなたを叱るなら、僕のことを直接叱りますよ。僕の父なんですから」

「で、ですね、すみません……」

変な口論の末、シンとその場が静まり返る。やはり、レイシス様との会話は苦手だな、とノエルはため息をついた。

「とりあえず、これは没収します」

「没収!? だ、だめだめ、困ります！ それは借り物なんですよ！」

今までそんなことを言ったことも、ノエルのものを没収するなんてこともされたことがない。どういう風の吹き回しだとノエルはボカンと口を開け、驚きを隠せなかった。

「これを返してほしいなら体調が万全になり次第、僕のところに来てください。……あ、ステラに言っ取り返さないようにしてくださいね。保護魔法をかけて保管しておきます」

「なっ、そ、そこまでしなくても！」

「あなたが僕のところに来ない限り返しませんから。そのとき、この本を借りた本当の理由を教えてください」

そう言って、レイシスは薬草と引き換えに『エーデ』を持ってヴァレンティン家から去っていった。

「本当に意味分かんない……」

自分が死んで過去に戻ったこともまだきちんと理解できていないのに婚約者の不可解な行動も理解できず、ノエルはベッドの中に引きこもった。



翌日、ノエルは朝からステラに念押しされていた。

「ノエル。今日、ちゃんとレイから本を返してもらってね？」

「う、うん」

そうステラに言われ、ノエルはため息をつきながら頷いた。

レイシスから『エーデ』を取り上げられ、「返してほしければ自分の元に来い」と言われたことを思い出すと、ノエルは気が重くなった。

「ジュリアとハンナには暗示魔法をかけてるから、まだ本がなくなったことに気づいてないけど……私の魔法の効果は長く持たないから、絶対に今日返してもらって！」

「分かってるよお……」

実は、レイシスがヴァレンタイン家から去ったあと、屋敷中が大騒ぎだった。婚約してから今まで数回しかヴァレンタイン家を訪れたことがないレイシスが、ノエルを氣遣って薬草を持ってきてくれた——たったそれだけでヴァレンタイン家では大ニュースになる。

ルナは満面の笑みで煎じた薬草を持ってくるものだから、体調不良なんて嘘だったのに、ものすごく苦い薬をノエルは渋々飲み干した。

しばらくして、父であるヴィンセントがノエルの部屋を訪れた。

「ノエル、昨日はレイシス様が会いにきてくださったみたいだな」

「……はい、そうですね」

「薬草をくださったと聞いた。なにか良い品を持ってきちんとお礼にいきなさい」

ノエルは父からレイシスの話をされてぎくつとした。この話が父の耳に入っていなければ、『エー

デ』を返してもらっただけで終わらせようと思っていたのだ。だが、父に知られたのであればきちんとお礼をしないと、あとから怒られてしまう。怒られるところを想像してノエルは心の中で舌打ちをした。

「良い品と言われても……」

昨日はどこにも出かけていないので、ノエルが用意しているはずもない。なにか適当にお菓子でも包めないかとルナに視線を移すと、彼女は綺麗にラッピングされた小箱をスッと差し出した。

「こちらをどうぞ、ノエル様」

「……これは？」

「レイシス様のお好きな、隣国、レガルドの茶葉です。こちら綺麗に包んでおきましたのでそのままお渡しいただけます」

随分と手際がいいなど、ノエルはルナを見やる。レイシスが珍しく訪ねてきたことで、ルナはこうなると予想して準備してくれていたのかもしれない。

「でも、レガルド産の茶葉なんてよく手に入ったね」

「実は、街に新しくオーブンした店で奇跡的に購入できたのです。なにかの折に役立つかと思ひ、包んでおきました」

ルナが用意してくれたレガルドの茶葉を見て、ノエルはふと思ひ出す。

（そういえば確かに、レイシス様が好きだったような……）

レイシスの好みをきちんと聞いたのは随分前のことで、そうだったかもしれない、というふんわ

りとした記憶がノエルの頭をかすめた。

ノエルがレイシスに贈り物をするのは年に一度、彼の誕生日くらいである。婚約者がいる周りの友人たちはちよつとしたプレゼントを日常的に贈っているのだと聞いたことがある。しかし、ノエルたちはそうではない。

プレゼントの数イコール愛情の大きさではないが、それほど婚約者のことを想っているという印象なのだと言っていた。ノエルはそんな友人たちの幸せそうな姿を複雑な心境で見ている。レイシスとイヴァンが城下町に出かけている姿は何度か見たことがあったし、彼はイヴァンへの贈り物で精一杯なのだろうと思っていた。レイシスはノエルに興味がないから仕方がないと諦めていたことも。

「……じゃあ、こちらの品をレイシス様にお渡しするよ。ありがとう、ルナ」

ノエルは茶葉が入った小箱を鞆に入れ、馬車に乗って学園へと向かった。

「ノエル様！ ご体調はもうよろしいのですか？」

「ノエル様のお顔を一日見なかっただけでとっても寂しかったですわ！」

たった一日休んだだけなのに、ノエルが学園の門をくぐると数人の生徒に取り囲まれた。

「人気者だね、ノエル」

多くの生徒を掻き分けながら、やっと教室に辿り着くと、隣の席の友人からポンつと肩を叩かれた。

「ウインター……今来たばかりなのにもう帰りたいよ」

「あはは。朝からあんなに囲まれたらそうなっちゃうか」

そう言って苦笑する彼は、ホワイト公爵家の次男でアルファの性を持つウインター・ホワイトだ。

青みがかった長い黒髪が特徴的で、彼の瞳は透き通るような海の色。レイシスよりも背が高く、

第一印象はとても威圧感があるが、話してみたらとても優しい好青年だ。

ホワイト公爵家は王族の分家であり、ウインターはイヴァンの一番の婚約者候補として名前が上がつている——というところまで思い出して、ノエルはハツとした。

（ウインターってイヴァン殿下と結婚するんだっけ、そういえば……）

イヴァンの在学中に婚約し、卒業後すぐに結婚した二人。だがイヴァンの死後、ウインターは心を病んだ。国に関することは王位継承権第一位に繰り上がったイヴァンの兄、ルシアン・ロードメリアに任せ、郊外に引越して療養していたのだ。

ノエルとウインターは家格こそ違えど、ヴィオクイーン学園に入学してからはいつしか対等な友人関係を築いていた。

そんなウインターを友人として側で支えられたらよかったのだが、ノエルもあのときは自分のことで精一杯だった。事件後はブラウン家から一步も外に出ない生活を送っていたノエルは、ウインターが郊外に引越す日さえ知らなかったものだ。

「そういえば、昨日レイシスがノエルの屋敷に行っちゃって噂を聞いたけど」

「……えっ、ほんと？ それって結構広まってる？」

ウインターがこそつと囁いた言葉に、ノエルはドギマギしてしまった。レイシスとの噂が広まるのは、これからの計画を考えると厄介だ。

「まあ、それなりに。レイシスが温室の庭師に体調不良によく効く薬草を聞いてたところを見たって生徒がいたらしくて。番想いの良いアルファだって言われてるみたいだよ」

「へえ……」

「ノエル、レイシスとは仲が良くないって言ってたけど、そうでもないのかな？」

「仲は良くないと思うけどね……確かに薬草はもらってたけど、体調管理をしつかりしろって怒られたから。きつと嫌味を言うための口実がほしかっただけだよ」

「でも、なんとも思っていない人のお見舞いに、わざわざ薬草を持っていかないとと思うよ。少なくとも俺は、ね」

ノエルは昨日のレイシスのことを思い出す。彼の行動は時間が巻き戻る前にはなかった行動で、ノエルも驚いた。ヒートではなく、ただ体調が悪いことに気がついて薬草を持ってきたレイシスは、本当にノエルのためを思って来てくれたのかもしれない——なんて、甘いことを考えた。だがすぐに、ノエルはそんな考えを払うように頭を振った。

「いやいや……レイシス様が俺のためになんて、絶対にあり得ないよ」

「まあ、ノエルとレイシスには今までの積み重ねがあるから、信じられないのは分かるけど」

「だよ。だって本当にびっくりしたんだよ！ イヴァン殿下にしか興味がないあのレイシス様が、学園を抜け出してまでうちに来るなんて！ 今日のはてつきり雪が降るかと思った」

「あはは、ひどい言われようだな」

ウィンターは笑っているが、ノエルは本気でそう思っていた。実際、寝て起きたら今の暖かい季

節に雪は降っていなかったし、ノエル自身も死んだあとの世界に戻されることはなかった。

ノエルが学園を休んだことでレイシスの行動に変化があったが、ウィンターから見せてもらった昨日の授業範囲には覚えがある。やはりノエルは巻き戻ってきていて、ノエルの行動次第でこれらの未来も変えられるのだろう。

「ノエル、大丈夫？」

「え？」

「なんか顔色が悪いというか……まだ体調が万全ではないんじゃないか？」

「いや、そんなことは……考え事をしてたからあまり眠れなかったんだよ」

「へえ。君を悩ませるのはどんなこと？」

ウィンターに計画を話すかどうか迷ったが、彼は博識はくしきなのでいいアドバイスをくれるかもしれないと思った。

「実は、小説を書くのに挑戦しようと思っ

「ノエルが？ それはまた新しい試みだね」

「突然、自分でも書いてみたくなってる……変かな？」

「いいことだと思うよ。卒業したら今みたいに自由に動ける時間も減るだろうし、やりたいことはやっておかなくちゃな」

突拍子もない計画のことを言ったら『伯爵令息がそんなことを？』と馬鹿にされるかもしれないと思ったが、ウィンターは笑うことなく背中を押してくれた。

「どんな話を書こうとしてるんだ？」

「えーっと……オメガの王子と、その幼馴染で側近のアルファのロマンスものかな。二人は運命の番ではないけど、昔からいつも一緒に恋心が芽生える……みたいな。途中、幼馴染のアルファに運命の番が現れて二人の仲を邪魔するんだけど、それでも二人はお互いじゃないとだめっていう感じの……」

ウィンターに説明しながら、自分たちの三角関係にあまりにも酷似こくじしすぎだろとかと今さらながらノエルの頭をよぎる。ただ、ウィンターは顎に手を当てながら「斬新で面白そうだな」と言うので、ホッと胸を撫で下ろした。

「運命の番を選ばないで、自分の心に従うオメガとアルファの話か。書き終えたら読ませてくれる？」

「恥ずかしいけど、うん……読んでくれたら嬉しい。あ、でも、俺が作者だっていうのは内緒ね？」

「もちろん。俺とノエルだけの秘密にするよ」

ウィンターがスッと小指を差し出してきたので、ノエルもそれに応えた。二人の小指は絡み合い、秘密の約束が結ばれた。

「……今のノエルは、輝いて見えるな」

「え？ 俺が輝いて見える？」

「ああ。新しい挑戦にわくわくしているような……なにか楽しいことでも待ってるような、そんな感じ」

「そう……かな？ 目標があるからかも」

ノエルの目標は、第一に十年後に死なないこと。色んな出来事を変えるにはレイシスとの婚約解消が必要で、イヴァンが生存する可能性を残すためにも、レイシスとイヴァンには結婚してもらわなければならない。

そうしたら二人は晴れて長年の想いが実ることになるし、ノエルも死ななければ、双方ハッピーエンドというわけだ。

——煮るなり焼くなり殺すなり、好きにしろ。

そのとき、再びあのレイシスの言葉が脳裏に響き、ノエルは眉間に皺を寄せる。同時に仮面の男のくぐもった声を思い出し、鳩尾みぞうちが冷えるような悪寒を感じた。

何度も繰り返されるそれは、まるで一種の呪いのようで……



「ノエル、ノエル、なにしてるの？」

「昨日は来なかったわね、ノエル」

目の前を飛び回っている妖精たちの声でノエルは我に返った。

昼食をとりながらロマンス小説のネタをノートに書き留めていたのだが、途中でボートとしていたようだ。

「お昼ご飯の時間にお勉強してるの？」

「いや、これは……ちよつとメモしたいことがあっただけ」

妖精たちに見られないように、ノエルは慌ててノートを閉じた。妖精たちは良くも悪くも素直なので、それ以上は追求されなかった。

「そういえば、昨日レイが薬草を摘みにきたわ！」

「そうそう！ ノエルのために持っていきたいって、庭師のヴィオレットに相談してたの」

「愛されてるわね、ノエル！」

ノートへの興味が逸れたと思ったら、今度はレイシスの行動を賞賛し始めた。妖精たちもノエルとレイシスが運命の番であることを知っているので、二人が幸せであることを望んでいるようだ。

「愛……されているわけじゃないと思うよ」

レイシスの行動はあくまで体裁を保つためだろう。それ以外、彼にはなんのメリットもない。冷めた考え方だが、それが今まで見てきた結果でありレイシスの性格なのだ。

「——あら、ノエル。イヴァンだわ」

「イヴァンがこつちに来た！」

イヴァンが来ていると妖精たちが騒ぎ出す。「えっ」と思ったときには、すでにイヴァンもノエルを見つけていたのか、ノエルの目の前に太陽のような彼が立っていた。

「ノエル、奇遇だな」

「イヴァン殿下、ごきげんよう」

ノエルは慌てて立ち上がり、イヴァンにお辞儀をする。イヴァンは笑いながらノエルの肩に触れて、頭を上げるように促した。

「そんなにかしこまるな。私とお前の仲じゃないか」

「……ありがとうございます、殿下」

いつ見ても、惚れ惚れするほど美しい人だ。

ノエルの髪色を月の光にたとえるなら、イヴァンは柔らかい陽の光のような金色の髪を持ち主だ。肌は雪のように白く、首元には瞳の色と同じ紫色のチョーカー。これは、アルファに無理やりうなじを囁かれても番にされないようにするためのものである。ノエルより少し小柄な彼は、王になるために生まれたのかと思うほど、言い伝えを連想するオメガそのもので、その美しさにいつもうっとりしてしまう。

「昼食は？」

「今ちようど、とつていました」

「それだけか？」

「え？」

「それ」と、言つてイヴァンが指差したランチボックス。その中にはサンドイッチが二切れと、サラダのカップ、それにポタージュが入っている。それだけと言われる量ではないとノエルは首を傾げたが、その瞬間、イヴァンの後ろからスツと進み出た男の視線がノエルに突き刺さった。

「お前の婚約者殿は少食で心配になるな、レイ？」

「――そうですね」

「いえ、あの、一日の食事はこれだけではないですから！」

ノエルは慌てて弁解してみるが、後ろにいる男が「はあ」と重いため息をつく。ノエルを責めているような態度に耐えられず、思わず俯いた。

「僕が食事の管理まではできません。本人がいいというならいいんでしょう」

「そういうものか？ お前は私にはいつも口うるさいじゃないか」

「それは……殿下の体調管理は側にいる者の務めですから」

いつもイヴァンに引っ付いている男――レイシスは淡々とした様子で、ノエルよりイヴァンを優先する言葉を放った。

（……相変わらず、分かりやすい男）

レイシスの態度の違いは明らかで、あまりにも素直なレイシスを見るとノエルは呆れて笑いそうになった。

「レイから聞いたが、昨日は体調不良だったんだって？」

「あ、はい……少し眩暈と頭痛がひどかったので」

「ふふ、だからか……お前が慌てて飛び出していったわけだ」

「……殿下」

「え？」

イヴァンがくすくす笑っている意味がノエルにはよく分からなかった。ただ、レイシスの眉間の

皺が深くなったので彼の機嫌が良くないことだけは分かる。元々ノエルはレイシスのそんな顔が苦手だったのだが、なにより彼はノエルを殺した黒幕かもしれないのだ。落ちついていられるわけがない。

レイシスの不穏な空気を感じ取ったノエルのうなじが、なぜかじくじくと痛み、ノエルは無意識に首元のチョーカーを撫でた。このチョーカーはノエルの髪とレイシスの瞳に合わせた銀色をしていて、婚約してすぐの頃にレイシスから贈られた。

レイシスは顔を合わせるといつもこのチョーカーを一瞥するが、今は、お前の命は握っているぞ、と言わんばかりの圧を感じる。チョーカーに首を絞められる想像をして、ノエルの背中に悪寒が走った。

「最近はずいぶん話せていないから、今度一緒にお茶をしようか」

イヴァンの声にノエルは我に返る。ぼーっとしていたノエルをレイシスとイヴァンは不思議そうに見つめていた。

「そ、それはぜひ……嬉しいです」

「レイも一緒にいいだろう？」

「はい、殿下」

反射的に返事をしてしまったものの、これはノエルにとってチャンスともいえる誘いだっただけ。レイシスも一緒にお茶をすとなれば、イヴァンとレイシスのことを思う存分間近で観察できる機会になるだろう。

「邪魔をして悪かったな、ノエル」

「いえ……ごきげんよう、殿下」

見送りをするためノエルも温室の入り口まで歩いていくと、イヴァンが温室を出た瞬間にレイシスからぐっと腕を引かれた。

「あの本を返してほしいなら、放課後に第三図書室へ来てください」

無駄話は一切しない、要点だけまとめて話したレイシスはそそくさと温室を出ていった。

「……人の本を奪っておいで偉そうに！」

レイシスの姿が完全に見えなくなつてから、地団駄^{じだんだ}を踏みながらノエルは唇を噛み締めた。

「何様のつもりなの！ 俺のことをなんだと思つて……！」

（――馬鹿らしい。考えても仕方がないことなのに）

レイシスがノエルのことをどう思っているのかなんて考えるのは時間の無駄である。どうせこの一年で一生涯の縁を切るのだから、どう思われていようが関係ないのだ。

「とりあえず、『エーデ』を返してもらわないと」

あつという間に放課後になり、ノエルは第三図書室へ行く。しかし、ドアをあけるのを渋つていた。レイシスから指定された第三図書室は生徒会メンバーである会長のウィンター、副会長のイヴァン、書記のレイシスたちしか使用できない場所だ。

つまり、ウィンターやイヴァンがいなければ、レイシスと二人きりになってしまう。

「さすがに、少し怖いかも……」

なんせ相手は、自分を殺したかもしれない男。いつから殺意を持たれていたのか分からないので、密室で二人きりになるのは危険だとノエルの頭の中で警報が鳴っていた。

「……いつまでそこに突っ立っているつもりですか？」

「わあっ！」

いつの間にか、ノエルの後ろに立っていたレイシスから声をかけられ、びくつと体を震わせて飛び退いた。レイシスはそんなノエルを見て呆れたように息を吐き「大袈裟^{おおげさ}ですわ」と抑揚^{よきよう}のない声で言う。その言葉に、ノエルはさらに縮こまった。

「……あの、約束通りここに来ました。なので、本を返していただけませんか」

密室で二人きりという緊張感でノエルの心臓は狂ったように暴れ出した。

さつさと本を返してもらつて帰ろうと思い、言葉を絞り出したのだが、レイシスは窓に寄りかかつてじつとノエルを見つめ返してきた。

「確かにあなたが来ないと返さないと云つたのは僕ですが、他にも約束をしましたよね？」

「約束？」

「なぜこの本を借りたのか、本当の理由を教えてください」

（まさかその言葉が本気だったなんて！）

ノエルは図書室の床に視線を落とし、なんて答えたらいいか迷つた。すると、「……そういうことに、興味があるということですか？」と、不機嫌そうなレイシスの声が頭上に降ってきて思わず

立ち読みサンプル はここまで

顔をあげた。

「いや、いやいや、違います！ 俺は別にそういうことに興味があつて借りたわけじゃなくて！」

「言い訳はいりません。はあ、まさかあなたが破廉恥なことに興味があつたとは……」

「ちが、俺が、興味があつたのは恋愛のほうで……っ」

「……………は？」

胃に振動が伝わりそうなほどの低い声が耳まで届く。

それはそれで語弊があるのだが、間違いではない。

最近流行りの恋愛ものを調査して、ノエルが執筆しているレイシスとイヴァンの恋物語に肉付けするためなのだから。

ただ、ノエルが「恋愛に興味がある」と言うのとレイシスはさらに怖い顔になり、眉間には皺が深く刻まれた。

「恋愛に興味があるなんて、それはいったいどういうつもりで——！」

レイシスが声を荒らげた途端、図書室の外から誰かの話し声が聞こえてくる。

ノエルはレイシスに腕を掴まれたまま、図書室の奥にある柵と柵の間に隠されて、声を出せないように口元を手で塞がれた。

「すまない、ウインター。探し物の手伝いをさせて」

「滅相ありません。俺でよければいつでもお手伝いしますよ」

「手伝ってほしいときに限ってレイの姿が見当たらなくてな」

「珍しいですね。でも、俺も図書室に用事があつたのでよかったです」

入ってきたのはウインターとイヴァンで、ノエルに緊張が走った。二人の声が聞こえた瞬間、レイシスの手に力が入ったのを見るに、彼もイヴァンに勘違いされたくないのだろう。ノエルは極力息を殺し、じっと耐えた。

「ウインターも本の探し物か？」

「ええ、ちよつと。恋愛ものの小説を探してまして」

「へえ！ それはまた、お前がそんな小説を好むとは知らなかった」

「俺ではなくて、友人のために探しているんです。恋愛について勉強したいみたいで」

「そうか。友人思いだな、ウインターは」

ウインターとイヴァンの会話に、レイシスの手がびくりと反応した。ノエルはチラリと彼を盗み見ると、鬼のような形相で声のするほうを見ていた。その顔にドツと心臓が大きく跳ねる。

（——ああ、この顔。結婚してからもこんな顔しか見たことがなかった）

きつと、ローブの男の脅迫状に返事をしたときのレイシスもこんな顔をしていたのだろう。息を押し殺したいノエルの意思とは裏腹に、カタカタと小さく体が震えてきた。

その様子にレイシスはなにを思ったのか、ノエルに視線を戻し怪訝そうに見つめる。

「……………どうしました？ 大丈夫ですか？」

「あ、は、はい……」

ウインターたちが図書室を出ていったあと、やっとレイシスから解放されたノエルはレイシスカ